

薪村〔淀大橋より巽の方二里許にあり、其間に村里多し。大橋南爪より順路あり、美津、生津、川口、奈良（上下

あり）、上津屋（浜、里、東、上津屋と三村あり）、野尻、岩田、岡村、山王、等の民居を東西にし、あるひは中を通りて、薪天神森に至る、是則大和街道なり。次下に載るは水主の南にして木津川を隔て十町余にあり、地境うしろは河内堺の山にして、前に木津川を帯る。この薪村は蕙を織て産業とす、薪蕙世に名高し〕

薬師堂〔薪の坤二十町許、神南備山の麓にあり。本尊薬師仏は慈覚大師の作なり、坐像三尺余。此堂はじめは神南備の山上にあり、近年こゝに遷す〕

天神社〔薪の南に双り、天神社前編に見へたり。此所より八幡に至るは、薪の乾に手原川原あり、是より大住松井を経て志水に至る、又此所より南に至れば興戸（南北あり）、高木、越津、菱田、僧房、祝園、土師を経て大和歌姫に出る〕

酒屋社〔南興戸民居の西山上にあり。延喜式に載たる綴喜郡酒屋神社是なり、土人生土神とす。例祭九月十一日〕

郡塚こほりづか〔同所里さとの良半町ばかり田の中にあり。上に古松ありて、これを郡塚こほりづかといふは当郡験のため築なりとぞ〕

普賢寺溪ふげんじだに〔興戸こうとの南二十町許にあり。此所の総名にして、溪は西より東にわたる、中には砂川すながはありて木津川きづがはに入、

溪口のひがしの方に大和街道あり。其間の里は、高木たかぎ、段々良だゝら、上村かみむら、水取みづとり、高船たかふね、内田うちだ、天王村等なり〕

都谷みやこだに〔段々良村だゝらの西北五町許にあり。人王二十七代けいたい継体天皇の皇居ありし綴喜つゞきの都是なり。山城国やましろに於て皇居の創なり〕

日本紀曰 継体五年辛卯十月、都を山背やましろの筒城つゞきに遷す。云々。此地に皇居ありしゆへ中頃におよぶまでも、公問下司くもんげし等住て御調物を下知す、今其末流一家あり〕

名 寄 　　たが里につゞきの原の夕霞煙も見へず宿はからまし 家 隆

白山権現社はくさんごんげんのやしら〔段々良だゝらの西上村にしかみむらにあり、此所の字を御所内ごしよのうちといふ。天福の頃このゑ近衛基実公もとぎねの男撰政関もとみち白基通公住給ひ、

普賢寺殿と号す、其旧跡ならん。上村かみの大御堂おほみだうの号則普賢寺ふげんじといふて、基通公もとみちの建立なり。又普賢寺溪ふげんじだにも此卿の殿舎の地ならん、後考あるべし。大御堂前編に見へたり〕

天王てんわう〔普賢寺溪ふげんじの西の上たににあり、村の名とす。天王社前編に見へたり〕

草内渡口くさぢのわたし〔木津川きづをひがしにわたり玉水たまみづに至る、此渡口わたし太平記に出。草内村くさぢむらは高木たかぎのひがし十余町にあり〕

飯岡いのか〔草内くさぢの卯辰の方にあり。此岡いにしへは笠置山かさぎひがしの麓ふもとにあり、後世此所に漂流す、由縁末に見へたり〕

若王寺にやくわうじ〔下狛民居しもこまみんきよの南にあり、当寺若一王子にやくいちわうじの神宮寺じんぐうなり。今浄土宗の僧これを守る。本尊阿弥陀あみだ仏は春日かすがの作に

して坐像三尺ばかり、脇士は千手観音立像三尺許、又智証大師ちしようだいし自作の像あり、坐像三尺許、禅定ぜんぢやうの相にして両の手を重ぬ〕

若一王子社にやくいちわうじのやしろ〔仏殿ぶつでんの前にあり〕 稲荷社いなりのやしろ〔同所にあり〕

〔伝云、当寺は三井の智証大師ちしようだいしの開基にして、古は伽藍がらんぎ巍々たり。又最勝寺さいしようじの道智和尚だうち此寺の座主たり、此ゆへに駒僧こまぞう正じやうといふ非なるか〕

円満院塔えんまんゐんのたふ〔若王寺にやくわうじの北田の中にあり、五輪高さ一丈許。円満院えんまんゐんは三井の座主なり、只円満院えんまんゐんと称して靈号を失す〕

蔵岡山天神宮

〔若王寺の西二町許にあり、祭神天満宮、土人生土神とす。例祭は九月十一日〕

稲八間

〔下狛の坤にあり。民居を南北に分て、北稲八間、南稲八間といふ〕

武内社

〔南稲八間にあり、祭神武内臣、土人生土神とす。例祭は九月九日〕